

『宿屋の床の間』(二)

中村素堂

ある年の冬、新年号雑誌の原稿に追いつめられ雪の越後路へ入って、周囲の煩累をはなれ炬燵を机として、数日間ペンに明け暮れていたことがあった。まだこの節ほどスキーヤーがくまなく押しかけて来なかった時分の宿は、静かで時々雪がガラス戸を鳴らす程度のもの音だけという調子で、疲れた眼の持つてゆき場はまず床の間くらいしかない。

その最初にいた部屋には、曹洞の名僧の小品の偈のようなものが掛けてあり、これは解し得なかつた二字をいただいた公案のように休息のひまにも湯舟の中でも考えて、何か雪ごもりの佻しさを忘れていたが、寒さを避けて小部屋に替えてもらった方の茶床には、風格の高い印人として聞こえた故山田正平氏の義父で、明治・大正時代に翰墨界にも宗教界にも知られた山田寒山翁の作が掛けてあった。

因柄は、寒山か捨得のような童子がひとり皎々たる明月を仰いでいる俳画風の軽いもので、

吾心似秋月。碧潭清皎潔。無物堪比倫。教我如何説。と賛を入れ、

支那寒山寺伝法沙門寒山

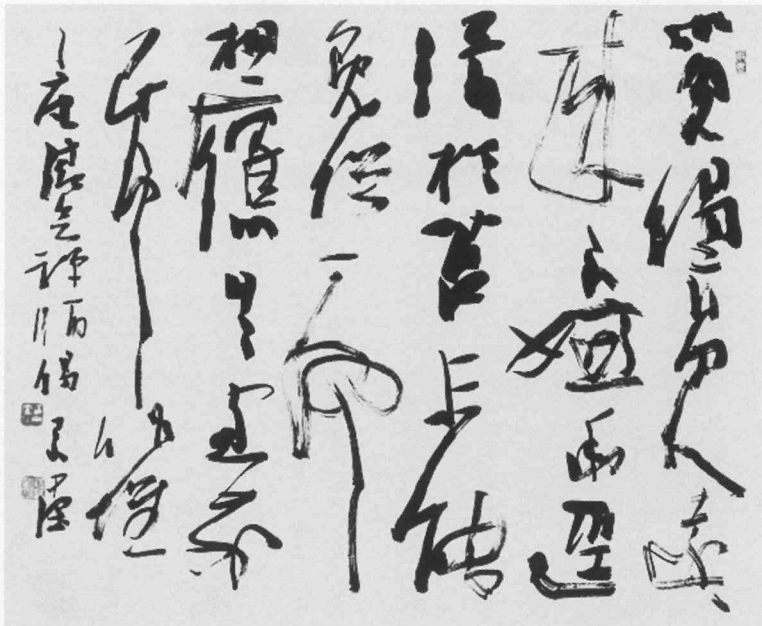
と署して、いかにも東京奥多摩の溪谷に中国の寒山寺を模した小刹を建て、修禪と翰墨に遊んだ珍しい文人僧のおもかげを遺憾なく露呈して数日の無聊の眼を救ってくれた。

その後ある辞典の原稿に追われて、那須の温泉に逃げていた時には、心の栄養にと平生珍重して措かない僧門の方々の茶掛を二つほど持って出かけ、滞在中の床に掛けてもらっていた。これには番頭氏も少々驚いたらしく、「お客様でお身の廻りのものをいろいろとお待ちになって来られる方もありますが、やはりお召し物が一番多くなります」とか何とかいってすっきり珍しがられてしまった。

むかし小堀遠州というお名の数奇者は、参勤交替みたいな旅中で

も、大好きな石灯籠を持ち歩いて、宿場々々の泊りのたびにその庭へ組立てて眺めていたという話である。凝り性もここまでくると大変である。まあ小品茶掛の幅のひとつ二つくらいを靴に入れて、筆墨の芳芬を旅の宿という境涯の中で心ゆくまで味ってみる。いかがです、ご賛同願えませんか——。ここまでくると、翰墨趣味もチト病いに近いですか。ご同好を誑うの一文件のごとし呵々。

〔仏教書道〕、昭和四十一年六月〕



覚偈高人遠々来 不嫌幽逕滑於苔
未能免俗聊相應 日々窓前掃作堆

(丁庵清欲禪師偈) 昭和50年